

# 新任教員紹介

## 新任教員

2015年11月20日付

看護福祉学部 助教(看護学科(母子看護学・小児看護学)) 畑江 郁子

## Message

## 定年退職される先生からのメッセージ



薬学部 教授  
唯野 貢司

私は、1976年4月から市立札幌病院に薬剤師として入社し、30年間勤務した後、薬学6年制教育がスタートした2006年4月に新たに開設された実務薬学教育研究講座の教授として赴任し、ちょうど10年間お世話になりました。当時、新米教員として何も分からないのに併せて1年生は6年制課程、在学生(2~4年生)は4年制課程と戸惑いも多い中でのスタートでした。しかし、薬剤学講座から配置換えで来てくれた小林道也助教授(現在:臨床薬剤学教授)が、強力な助っ人となって新設講座が立ち上がりました。2年目からは4年生6名が講座配属となり、夏休み後には研究室・ゼミ室・教員室などが出来上がりました。教員も病院勤務経験者の千葉薫先生、野田久美子先生が着任し、開設4年目には薬局勤務経験者の中山章先生、吉田栄一先生、櫻田渉先生が次々に着任し、教育体制も整備されました。4年制課程最後の2年間は、大学院生が修士課程に3名ずつ入ってきたため、近隣の医療施設との臨床研究など忙しい中にも充実した毎日を送ることができました。

6年制課程の準備では、まず実技試験(OSCE)への対応については、他大学のトライアルへの参加、模擬患者さんの確保、物品の準備、評価者の研修など色々なことがありましたが、大学の全面的なバックアップによる施設・設備の充実と、薬学部教員の全面的な協力による人員の確保などの体制作りを構築することができ、現在に至っています。長期化(計22週間)した実務実習の体制整備については、北海道地区調整機構の下で施設側(病院、薬局)の全面的な協力が得られ、全道各地の実習施設への挨拶回り・訪問については、薬学部教員の全面的な協力によって、大きなトラブルもなく現在まで順調に推移しています。

本当にたくさんの思い出でいっぱいですが、10年間多くの教員の方々と学生の方々に支えられて充実した日々を過ごすことができたことに深く感謝いたします。お世話になりました皆様のご健勝と、本学のますますの発展を心からお祈りいたします。ありがとうございました。



看護福祉学部 教授  
佐々木 重幸

2001年4月に当大学に赴任し、この3月末で15年となります。前職(北大病院救急集中治療部)とのギャップにやや戸惑いながら、これまで大きな事件・事故もなく無事過ごせたことは、多くの皆様からのご指導ご支援のおかげと感謝しております。

赴任当初は「臨床中心の生活」から解剖、病理、外科などを担当する「教育中心の生活」への変更ということで、生活は大きく変わりました。やがてそうした生活にも慣れ、この15年間、種々の学務や、多くの授業を担当する中で、学生の様々な面を見てきたと思います。特に学生部に属していた時は学生や親御さんとの接点も多く、考えさせられることも多々ありました。一方、臨床現場において卒業生の成長をみる機会も多く、40年を越える大学の歴史も実感しております。

「教育中心の生活」ではありましたが、医学系科目を担当する必要もあって臨床も多少続けてまいりました。この15年間、医療を取り巻く環境もずいぶん様変わりしました。高度先進医療の発達、再生医

療の進歩などで恩恵を受ける人がある一方、介護で大変な負担を感じる方々は加速度的に増えています。もともと、介護保険制度創設当初の理念としては、介護を家族の手から解放し、社会が担う制度を作る、というのがあったはずですが、今は、逆に介護の担い手としての家族負担がますます増えているように思えます。特養はなかなか入れませんし、国が推進する「サ高住」においても、介護必要度が重症化すると、ほとんど受け入れは困難です。20年前は冗談だったような「長生きのリスク」というのが現実になってきていると思います。

こうした中、医療系の大学卒業生に対する社会のニーズ・期待はとて大きく、卒業生においては、どうか、社会に求められているという誇りをもって、それぞれの役割や業務を達成して行ってほしいと切に望みます。最後になりましたが、皆様のご活躍と本学のご発展を心から願っております。



心理学部 教授  
坂野 雄二

この度、心理学部にて定年退職を迎えることとなりました。着任して以来あっという間に時が経ってしまいました。

1980年に千葉大学教育学部に講師として着任して以来、36年にわたる大学教員としての生活に一区切りの年を迎えることになりました。千葉大学に赴いたのは、「共通一次試験」という新しいシステムが始まって間もなくの時でした。そして、大学院修士課程の立ち上げ作業を行いました。その後、早稲田大学で人間科学部と大学院の新設に加わり、そして、本学で新設の心理学部と大学院の立ち上げに参画しました。考えてみると、いつも新しい何かを作り上げるという作業に関わってきたように思います。そして、ここ北海道医療大学心理学部にて無事定年を迎えることができたことを大変うれしく思っています。

この間、心理学部臨床心理学科、および大学院心理学研究科は、我が国の心理学の世界では一定の評価を受けるようになった

と思います。特に臨床心理学を専攻する大学院として、心理学研究科がその特徴としている科学者実践モデルに基づく臨床心理学教育は、全国の臨床心理学関連大学院の先駆けとなる教育・実践モデルとして評価を受けていると思います。また、最近の実証に基づく臨床心理学の領域では、「北に医療大あり」と言われるようになり、全国各地から本研究科で学びたいとする学生さんが集まるとともに(海外の大学を卒業した学生さんも多くいます)、研究と情報発信の拠点ともなってきました。修士生も北海道から沖縄に至るまで全国に散らばり、海外で活躍する修士生もいます。研究の場で、臨床の場で活躍している卒業生、修士生の姿を見ると、とてもうれしくなります。

研究の発展だけでなく、有能な人材を育てることは大学の重要な使命です。本学で研究・教育に携わることができたことが大学教員としていかに幸せなことかと実感させられます。北海道医療大学に感謝申し上げたいと思います。

## 定年退職される先生からのメッセージ



心理学部 教授  
中野 茂

2000年の夏、本学の非常勤講師をされていた京都大学の鯨岡先生から、『北海道医療大学が新学部を札幌に創るので、応募しませんか』という電話がありました。医療大学は、かつて、恩師、三宅先生が勤めていました。また当時私は、単身で兵庫県立大学に赴任していました。その後、初代学部長になられた高橋先生が、わざわざ、姫路まで訪ねてきてくれたこともあり、2003年より本学にお世話になることになりました。しかし、うかつにも、所属学科が「臨床心理学科」であることは、辞令まで見落としていました。

着任と同時に、高橋学部長から何か役職をと言われ、結局、最も苦手な学生関係の委員を、しかも、今日まで受け持つことになってしまいました。ただ、在任中に休学時の授業料を免除するようになり、これは、学生のためになれたと思っています。さらに、この新設の心理学部の学生が就活の時期になったとき、国試合格の道はなく、学生の間に進路への戸惑いが起きました。そこで、「就職委員会」を

立ち上げ、就職ガイダンスを開催し、さらに、「キャリアプランニング」という講義を立ち上げました。しかし、就活に関しては、全くの素人で、成り行きでよくここまで来られたというのが正直なところです。

一方、科研費を獲得して、乳児研究プロジェクトを院生と立ち上げたことは、最もうれしいことでした。市内の赤ん坊を対象に、0歳児が親の期待に沿った行為をすること、嫉妬心を持つこと、モーショニーズという独特な動きをすることなどを見いだししてきました。こうした成果にもかかわらず、「臨床心理士は臨床心理士が指導しなければならぬ」という理由で、私の手元から院生が消えてしまったのは、最も悲しい出来事でした。

先日、元院生、ゼミ生の皆さんが無事に定年を迎えたことを祝ってくれましたが、彼ら、彼女らが立派な人生を送っている姿を見て、何かしら、学生の人生に貢献できたことをうれしく思いました。やはり、学生あつての教師なのだと思えました。



リハビリテーション科学部 教授  
国永 史朗

本学の創立から2年目となる1975年4月に、音別校の教養部・生物学教室(主宰:横沢菱三教授)の助手として赴任しました。爾来(じらい)、41年の星霜を経る間、多数の学生たちや教職員の方々との出会い、貴重な体験をさせていただきました。深く感謝申し上げます。

大学生活での初めの頃は、教室員の理解もあり研究の時間に恵まれていました。遺伝子レベルから糸状菌類の分類と進化に関する研究を行い、DNA解読データは多くの興奮を与えてくれたことを懐かしく思います。また、国内外で共同研究を行い、その経験を共にした研究者と深い信頼関係が生まれ、エウダイモニア的な充実感を抱くことができました。

赴任からちょうど10年目に音別の教養部は当別へ移転となりました。その後、基礎教育部と改名、大学の大綱化のなか改組分属、私は歯学部にも所属となりました。しばらく本学はミニ教養部の期間がありましたが、医療系総合大学の体をなすようになり大学教育開発センターが新設されました。今度はそのセンターにも所属とな

りました。また、3年前に新設されたリハビリテーション科学部にも併任させていただきました。

身を置く部署の変遷のたびに複雑な心情にかられましたが、立ち位置がたとえ異なっても目の前の初年次学生にしっかりと向かい合うことは変わらない。この教育における不易を唯一の心の支えとして講義してきました。私の言葉で、学生たちが少しずつ変化し、成長していく姿をみるにつけ、私自身が大いに励まされたことを思い出します。

大学教育開発センターでの業務は、大学生活を大きく変えることになりました。知的興味のもと自由に研究をさせていただいたその恩返しのため、微力ながら本センターに全血を注ぎました。さらなる教養教育の活性化に向けては忘れもの多々の心境ではありますが、身も心も揺らされる貴重な経験をさせていただきました。

大学は厳しい状況に直面しています。辛い時代が待ち受けていますが、たゆまぬ改善を図りながらその難関に立ち向かい、本学がますます発展していくことを祈念いたします。



歯学部 准教授  
鎌口 有秀

以上の諸先生の他、

歯学部 鎌口有秀 准教授が定年退職されます。

ありがとうございました。

With heartfelt thanks.